

## 口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ＞  
口永良部島では、古岳火口付近で火山性地震が増加しており、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。本日（6日）06時までの24時間に30回発生しています。

火山活動が高まった状態となっていることから、本日（6日）06時20分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。

### 【防災上の警戒事項等】

新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

### ○ 活動概況

口永良部島では、古岳火口付近で火山性地震が増加しており、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。本日（6日）06時までの24時間に30回発生しています。火山活動が高まった状態となっていることから、口永良部島では火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

12月3日から5日及び11月20日から23日にかけて実施した現地調査では、古岳において噴気地帯と、火口内とその周辺で地熱域を確認しました。2024年10月に実施した上空からの観測と比べて火口及びその周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。2023年6月からの活動活発化以前と比べて地熱域の拡大や噴煙活動の高まった状態が続いています。

また新岳では、西側割れ目付近など火口周辺の地熱域に特段の変化は認められませんでした。

---

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。噴火警戒レベルの判定基準表については気象庁ホームページを御覧ください。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level\\_kijunn/keikailevelkijunn.html](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level_kijunn/keikailevelkijunn.html)

火口内の地熱域の最高温度は11月22日の観測では約151℃で、2024年10月に実施した上空からの観測と比べて明らかな温度の上昇は認められませんでした。2014年以降の噴火活動により火口底が深くなっているなど、火口内及び火口周辺の地形に大きな変化が認められました。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2023年9月以降次第に減少しています。2024年8月以降は1日あたり概ね100トンを下回っており、検出限界を下回る日も時々みられるなど少ない状態となっています。12月は40～60トンで推移しています。なお現地調査では、古岳火口内において硫化水素や二酸化硫黄の強い臭気が認められました。

GNSS連続観測では、2023年11月以降、山体の膨張を示す変動は認められません。

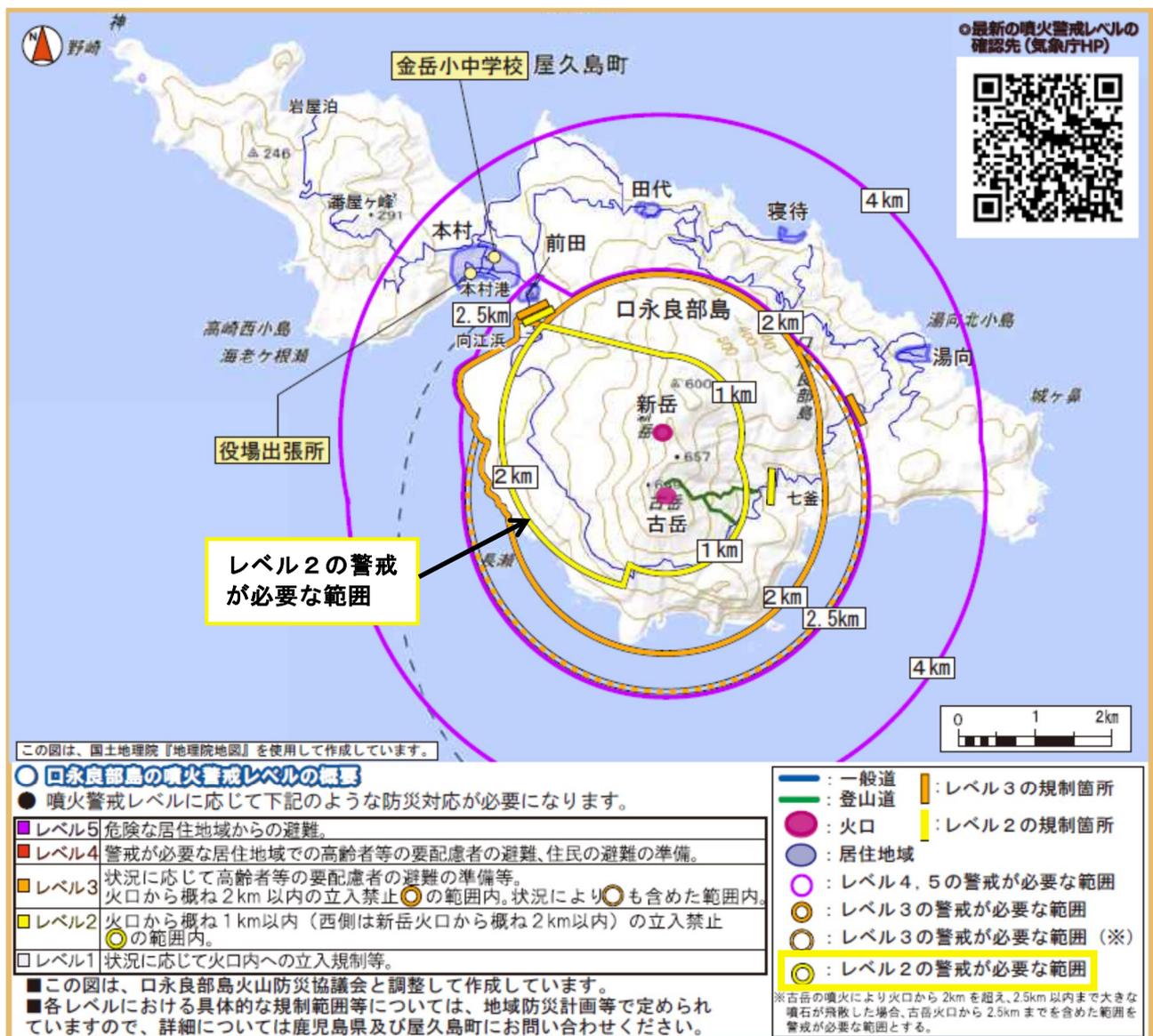


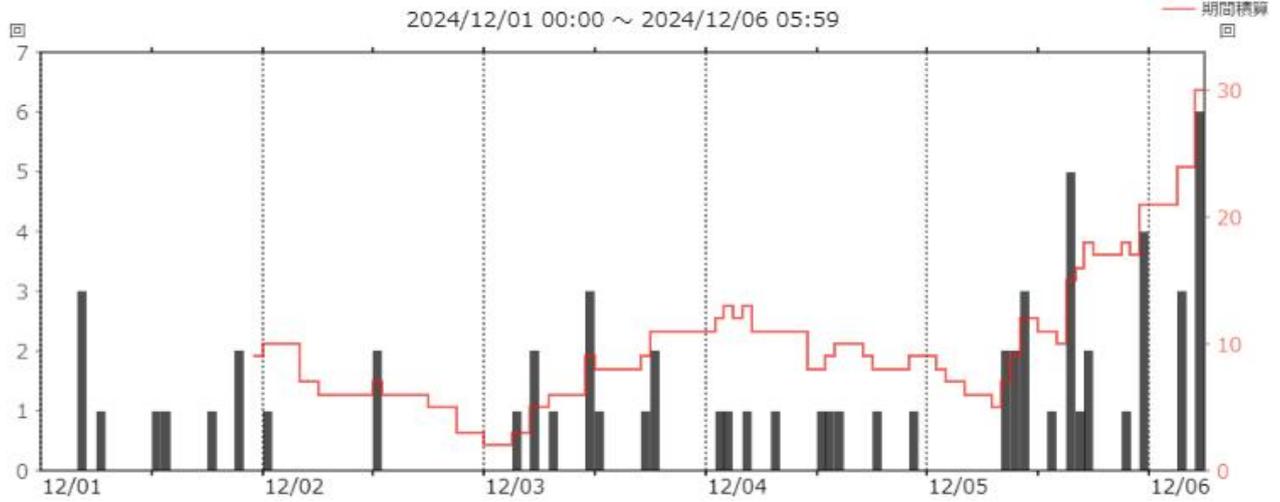
図1 口永良部島 警戒が必要な範囲

新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

### 口永良部島 火山性地震の時間別回数及び24時間積算回数



### 口永良部島 火山性地震の最大振幅（FDKL（京）観測点上下動成分）

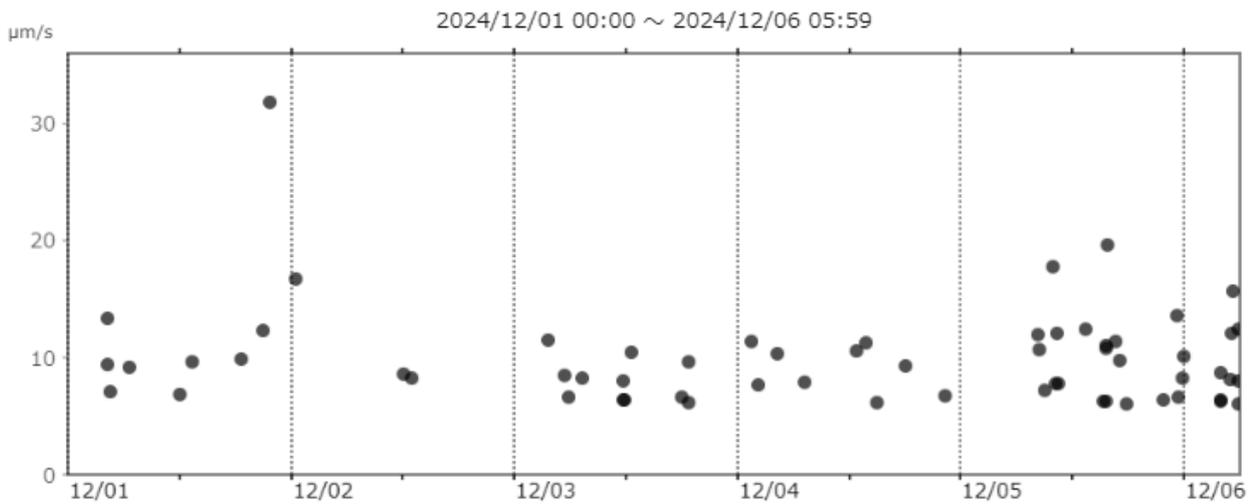


図2 口永良部島 口永良部島の火山性地震発生状況（2024年12月1日～6日06時までの速報値）

- ・ 古岳火口付近で火山性地震が増加しており、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。本日（6日）06時までの24時間に30回発生しています。
- ・ 振幅の大きな火山性地震は発生していません。

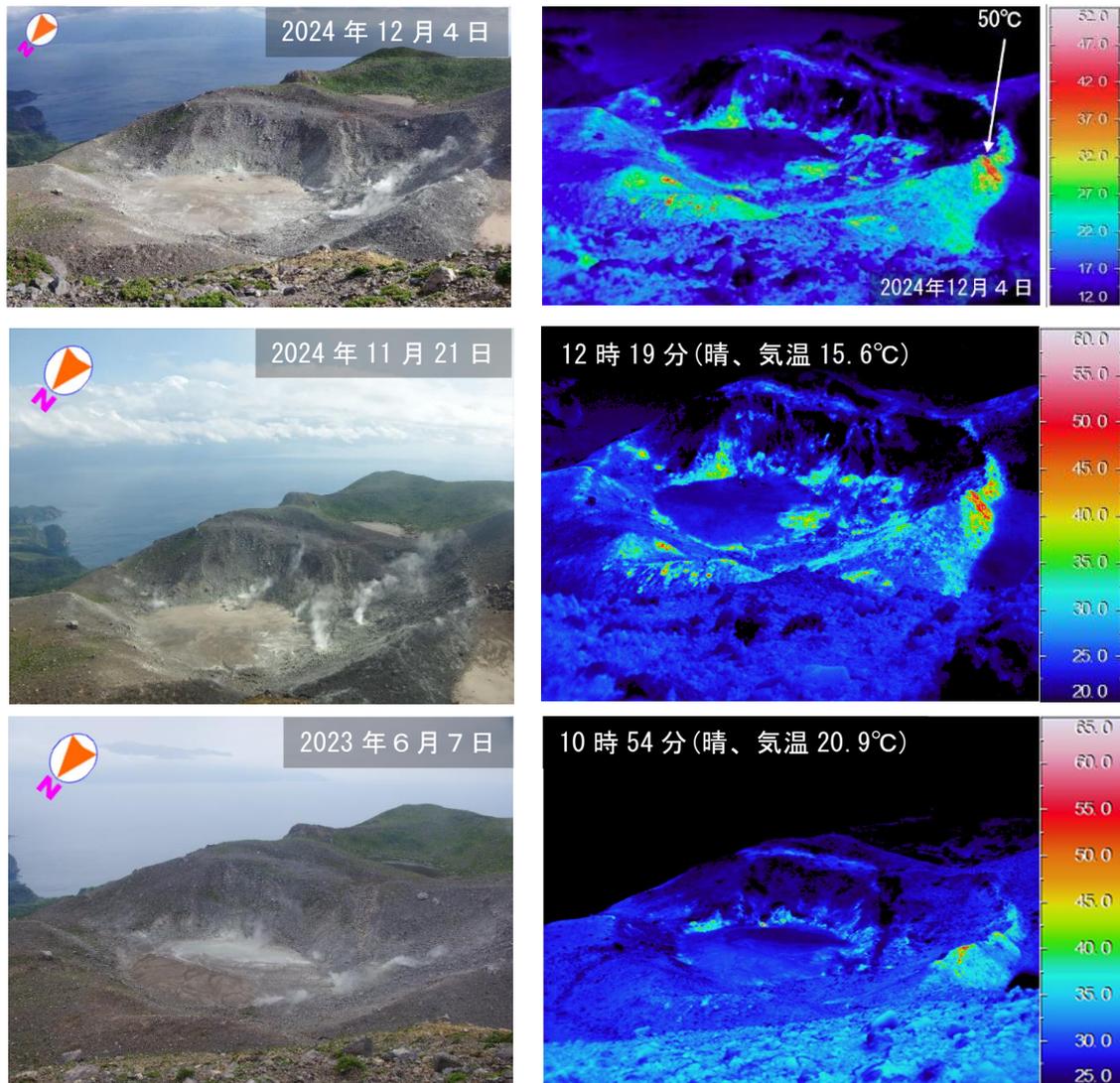


図3 口永良部島 古岳火口の状況（古岳山頂付近から観測）

- ・12月3日から5日及び11月20日から23日にかけて実施した現地調査では、古岳において噴気地帯と、火口内とその周辺で地熱域を確認しました。噴煙の状況及び地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。
- ・2024年10月に実施した上空からの観測と比べて火口及びその周辺の状況に特段の変化は認められませんが、2023年6月からの活動活発化以前と比べて地熱域の拡大や噴煙活動の高まった状態が続いています。
- ・古岳火口内において硫化水素や二酸化硫黄の強い臭気が認められました。

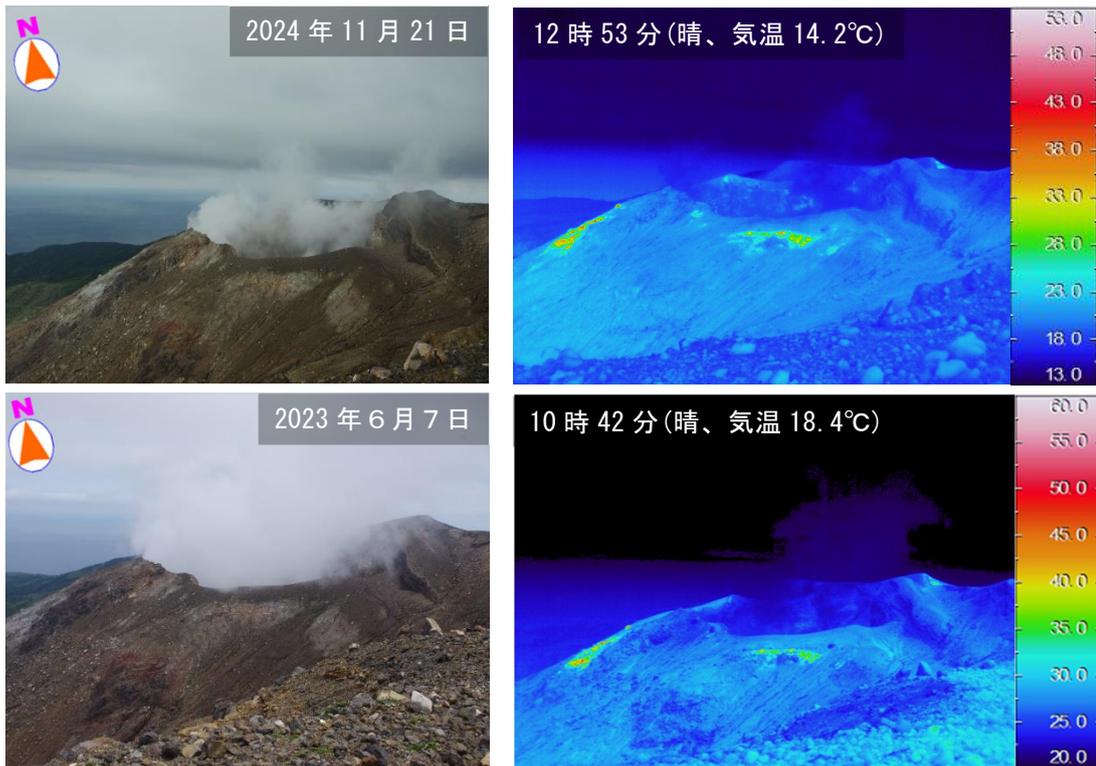


図 4-1 口永良部島 新岳火口外壁南側付近及び新岳火口西側割れ目付近の状況（古岳山頂付近から観測）

- ・11月20日から23日にかけて実施した現地調査では、前回（2023年6月7日）の観測と比較して、新岳火口西側割れ目付近や新岳火口外壁南側の地熱域の状況に変化は認められませんでした。
- ・12月3日から5日にかけて実施した現地調査においても11月の観測と比較して特段の変化は認められませんでした。

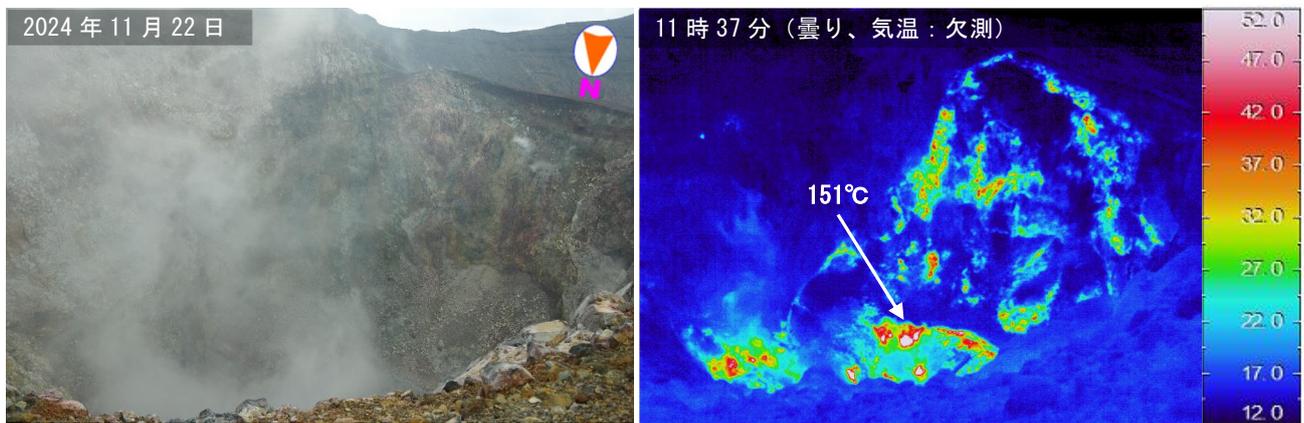


図 4-2 口永良部島 新岳火口内の状況（新岳火口縁北側から観測）

- ・11月20日から23日にかけて実施した現地調査では、新岳火口内に地熱域を引き続き認めました。地熱域の最高温度は約151°Cで、2024年10月に実施した上空からの観測と比べて急激な温度の上昇は認められませんでした。12月3日から5日にかけて実施した現地調査においても11月の観測と比較して特段の変化は認められませんでした。
- ・2014年以降の噴火活動により火口底が深くなっているなど、火口内及び火口周辺の地形に大きな変化が認められました。

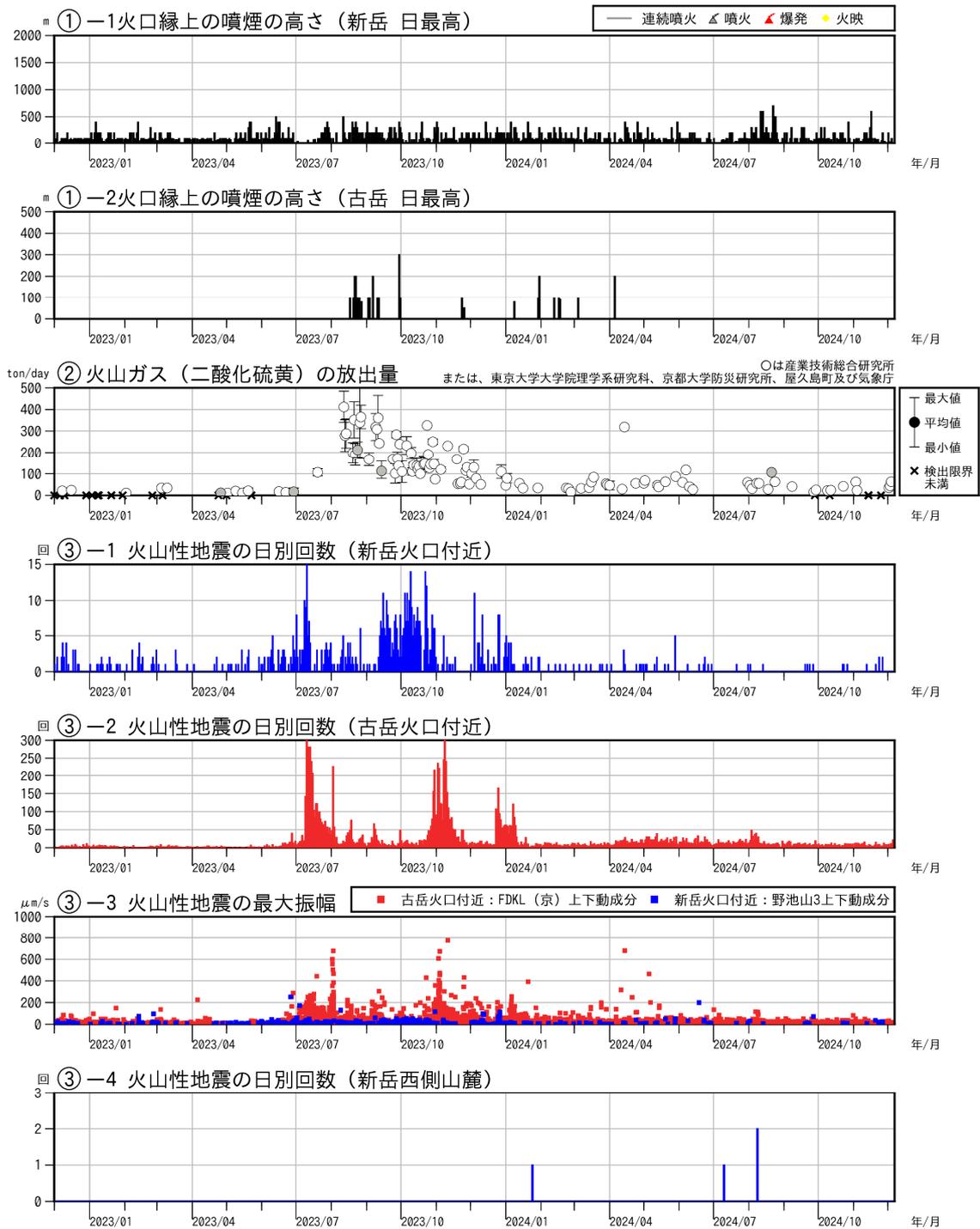


図5 口永良部島 最近の火山活動経過図（2022年12月～2024年12月6日07時までの速報値）

<11月以降の概況>

- ・噴煙の状況に変化はなく、白色の噴煙が新岳火口では最高で火口縁上 600mまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は確認されませんでした。現地調査において火口縁をわずかに越える白色の噴煙を観測しました。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり 100 トンを下回っており、検出限界を下回る日も時々みられるなど少ない状態となっています。
- ・口永良部島では、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。本日（6日）06 時までの 24 時間に 30 回発生しています。その後も古岳付近で火山性地震が発生しています。火山性地震は山体の浅いところで発生しており、震源は主に古岳火口付近で、新岳火口付近においても時折発生しています。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

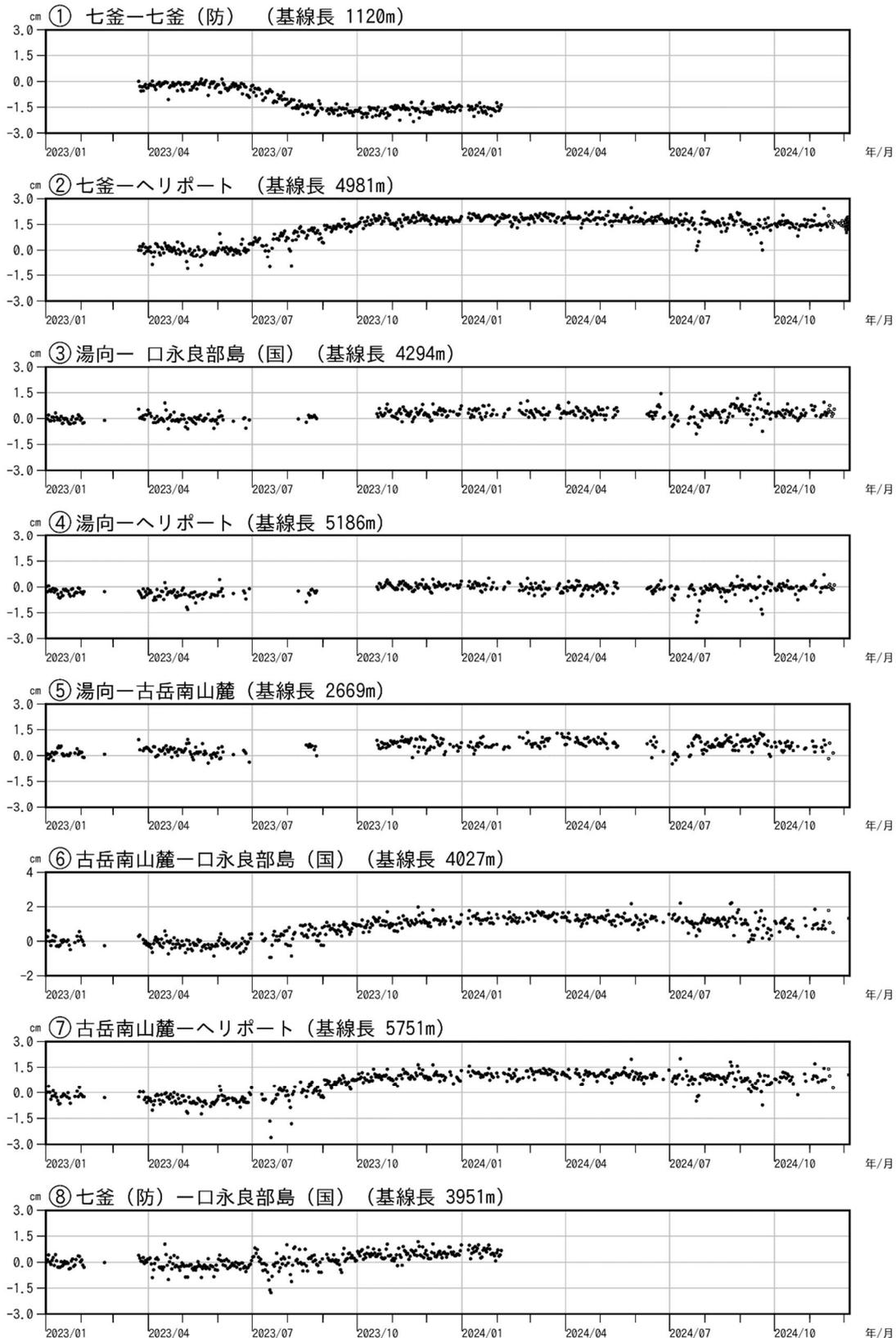


図6 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2023年1月~2024年12月5日)

GNSS 連続観測では、2023年11月以降、山体の膨張を示す変動は認められません。

これらの基線は図7の①~⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2023年3月23日の観測点修繕工事(七釜観測点)に伴うステップを補正しています。

(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所

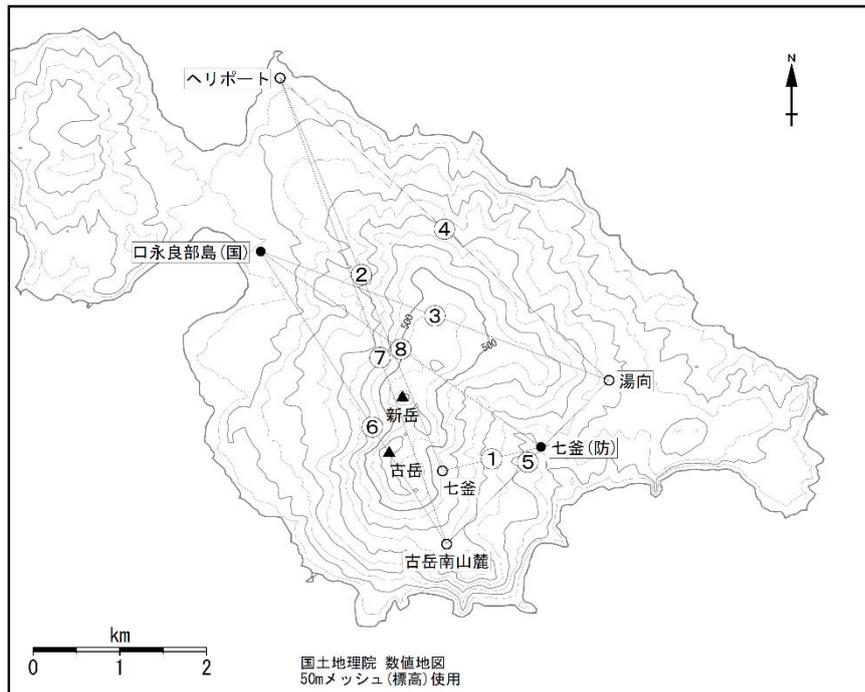


図7 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院、(防) : 防災科学技術研究所

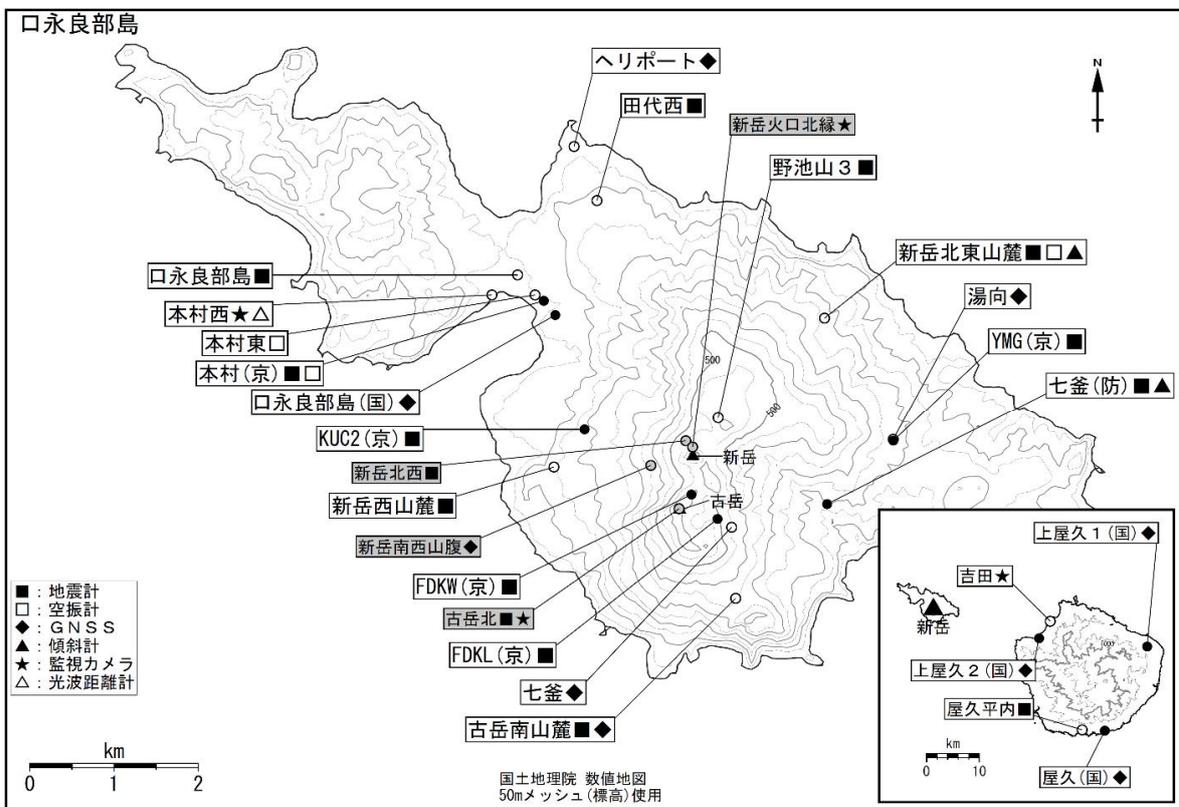


図8 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院、(京) : 京都大学、(防) : 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。